

---

# 偶然の不幸それとも・・・

冠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

偶然の不幸それとも・・・

### 【Nコード】

N5044K

### 【作者名】

冠

### 【あらすじ】

高校二年生になったばかりの音ノ葉伊織は友達がいらないや、できたのかもしれないができたばかりの奴は天野輝こんな友達望んでなかった！  
これが伊織の不幸の始まり・・・

## 第一話 不幸の始まり？

俺は、生まれたときから一人だった  
いや、別に家族はいる。

父と母と妹と兄と俺含めて五人家族だ。

一人だつてのは、友達がいなくてことだ。  
生まれてことかた、一人も友達がいな  
いないまま、十七年もたっている。

クラスの人の名前を覚えている人はいない。

放課後、そんな俺に不思議な奴が現れた。

「私の名前は天野 輝（あまの ひかる）だ。

科学部部长の君と同じ年同じクラス。」

勝手に説明している天野 輝は、俺から見て外見は綺麗で  
髪はきれいな黒色スラツとした体。目はコバルトブルー  
そんな奴がこの俺に向かって

「科学部に入れ」

と命令してきやがった。  
クソッ。

俺と輝が出会ったのは、春なのに蒸し暑い  
入学式の日。

あゝ。こんなことになるんだつたら休めば良かった。

たったそれだけで俺の今までの日常が大きく変わるなんて  
思いたくも無かった。はあゝ

**第一話 不幸の始まり？（後書き）**

初めて投稿しました。

いたらないところもありますが

未永く見守ってください。

## 第二話 人権って何？

「嫌だ」

これは当然の答えだろ。

知らない奴に命令されてでも  
入ろうとする部活なんてあるか！

「拒否権なんてないんだよ。

二年B組の音ノ葉 伊織（おとのは いおり）君  
もう入部届けは出している。」

「……なんで俺の名前知ってるの！？」

しかも、入部届け出されている！！！！  
くそ、不幸だ。

なんで俺なんだよ、勝手すぎんだろ、おい。

「なぜ自分なのかって顔してるね。ふ、ふ、ふ。」

気味の悪い笑い方をする輝は、望んでない答えをはきやがった。

「なんとなくだよ！」

そんなことを言ってる奴みたら

ツッコミを入れないわけ無いよな、な！  
でわ、ツッコミを入れさせてもらいます。

「あのかな手前が」だが断わる。「」

「???? - おい、なんだあいつ  
俺に拒否権はないって言ったくせに  
あいつはありなのかよ。ありなのか!

「そして手前じゃない輝と呼びたまえ」

ふぎけんな!何で始めて会った奴を  
名前で呼ばなくてはいけないんだよ。

「さあ。呼んでみたまえ輝ちゃん、と。」

しかも、ちゃんもつけるのかよ!!  
クソッ。

もうやけだ。呼んでやる。輝ちゃんって。

「ひか」「やはり気持悪いからさんにしてくれ。」

「ひk」「さんも無理だお前に似合わないな。」

「じゃーなんて呼べばいいんだよ!」

「輝でいいぞ。」

最初からそう決めとけよ

なんだこの恥ずかしさ

クソッ。

「まあ。そんなことはどうでもいい部室に来たまえ。」

「まだ入るなんていつてない。」

「入部届けは出している。拒否は許さん。」

「職員室言つて取りに行く。」

「ダメだ。拒否するな。」

「だか」「さあいくぞ」「」

俺は輝に手を引っ張られ無理矢理部室まで行かされる羽目に  
重要だから一回言っぞ無理矢理だからな！

第二話 人権って何？（後書き）

冠です。

感想とかあればお願いします。

### 第三話 科学部部室？

俺は、輝に無理矢理部室に行く事になったが  
今向かっているのは学校の屋上だ。  
屋上に部室ってありえないだろ。

とうとう屋上まで来てしまった。

ど、ど、どうすんだよ。

普通屋上に入ったら怒られるぞ先生に

このまま逃げるか。

よし逃げよう。怒られんのは輝だけで良い

俺は、怒られなくな〜い！

輝が扉を開けるときにダツシユだ。

輝は、たぶん右利きだろ（俺が勝手に決めた）

そして、今右手は俺の手を掴んでる。

「よし、ついたぞ。」

右手を離してドアノブに手をかけたらダツシユ！

「聞いているのか？おい。」

妙に寒いが俺は輝を怖がっているのかもしれん  
だが、最後に勝つのはこの俺だ！

「おい、輝は、右利きか？。」

「いや、私は、両利きだが。なぜそんなこと聞く？」

「なんでもない。ただ楽しみだからだよ。」

・・・てか、両利きかよ！。

輝すげえ〜な、おい！」

「そんな驚く事か？まあ良いここが部室だ。」

周りを見渡してみると室内は室内だがここどこ？

俺の計画がパーになったが屋上じゃなければ  
どうだっていい。

場所を輝に聞いてみれば良い。

「輝ここどこ？俺ら屋上に向かったよな？」

「何言ってるんだ君は？屋上だが。」

「はあ〜。どこが屋上だよ。室内は屋上とは言いません。」

「君は知らないのかね。屋上の隅に小屋があるのは？」

「そこが我々の部室だが。」

「そんなのあるのか？つまりここは屋上なんだな。」

「そつだ「先生に怒られるじゃねえか！」」

輝は、世にも珍しい生物を見ている感じで俺を見ている

『はあ〜。』しまいにはため息まで吐きやがった。

クソッ。

俺の事馬鹿にしてやがる。なんだったんだ！

「科学部は、屋上を使用許可出されているんだ

知らないのか？」

知るか〜！！俺はさっき入部したんだぞ！

しかも、強制的になのに分かるわけないだろ！

「なあ〜い。こんなところで話してんのあ〜？」

ぼけえ〜とした声が聞こえたが見当たらない  
何処だ！何処にいるんだ。  
お化けか？お化けなのか？  
それとも俺の頭がパーになって幻聴が聞こえてるのか？  
どれも嫌だ。

「なあく〜に頭抱えてんのおく  
面白い子〜。」

下から声が聞こえている。  
まさか。まさかなあく〜。  
下に目をやると小学生くらいの子がいた。



「ぐつちー、伊織いじってないで部活しましょ。」  
「そやねえ」。

あ、伊織君私のことはぐつちーって呼んでねえ」。

それも嫌だがこのチビを先輩つけて呼ぶほうが嫌だ。  
男なら分かるよなこの気持ち。

「ええー我が科学部での主な活動は、後々決めますう」。  
まずうーお茶会をしてえー親睦を深めましようう」。

こんなので大丈夫なのか。科学部！！

## 第五話 これが顧問？

クソッ。

なんでこんなところで女二人とお茶会なんてしなくちゃいけないんだ。

ああ。帰りた

「ぐつちー三人って寂しくないですか？」

「そうだねえ。顧問が来るまで待つてるう。」

顧問いるの！誰先生だ？

「あの顧問の先生って誰なんですか？ぐつちー。」

「え。知らんの？よく科学部に入る気になったなあ。」

だから強制的に入らされたんだっての！

ふざけんな！チビ！

「顧問は私と伊織の担任の先生の羽鳥 善道（はとり ぜんどう）だから

覚えとくようにしなさい。」

羽鳥かあ。あいつ体育の先生じゃなかったっけ？

あの熱血野郎が体育の事以外できんのかよ？

噂してると現れそうだからこの話は早く切り上げよう

「輝聞きた。ふははは。みんな待っていたか！俺が善道だ！」

なんだこの熱風こいつ入ってきた瞬間ありえないくらい暑くなったぞ

クソッ。

こいつは化け物か！

「相変わらず暑苦しいですね。善。」

「なんだ新しい部員か？」

「そうですけどなんですか？羽鳥」

「なんだ伊織じゃないか」。根暗な奴が入ったな。ハハハハ。」

う、うぜ〜こいつ一言多いんだよ化け物。

しかも根暗じゃねーから友達いないだけだから・・・

あれ、友達いないのって根暗だからなのか！？

「伊織をいじめないください。善。」

「お茶会してるのか。ちようど良い俺も飲み物持ってきた

みんなで飲むぞ朝まで。」

「朝までであ〜無理ですう〜それでも先生ですかあ〜。」

わいわい

がやがや

こんな奴らの仲間入りしたくない

ど、ど、ど、ど、どうしよう

「いふおりくう〜んもうこっちきて遊びまふお〜よ〜。」

「うお。酒臭いぞ輝！羽鳥手前何飲ませやがった！」

「何言つてやがるお茶会つて言ったら酒だろ。」

「それでもお〜先生ですかあ〜。」

「これでも先生です。」

みんな悪の道に連れ込む先生の一人や二人いるもんだ。ハハハハ。

「



**第五話 これが顧問？（後書き）**

感想あるとうれしいです。

## 第六話 俺のせい？

チビと化け物の冷たい視線が痛い。  
なんでこんな事になったんだ。

謝るべきなの

いや、俺は悪くない

「伊織女を泣かせるなんて最低だな。」

手前に言われたくないんだよ！黙れ化け物！

「もっとおゝ大人になってくださいよおゝ。」

身長小さい奴に大人になれって言われたくないんだよ！黙れチビ！

「わ、分かりました。謝りますから

すみません輝さん。」

「うぐう。ぐすう。本当に反省してる？」

やべえゝ。キャラが違うのもすごいが

輝めっちゃかわええゝ。

「反省しました。だから泣き止んでください。」

「わかったあ！いおりくんはやさしいね。」

泣き止んだのは良いのだがすごい笑顔だ。

周りに花が咲いているくらい笑顔だ。

考えられん。これは生命の神秘？

「輝、ぐつちー、化け物、俺用あるから帰りますね。」  
「あれ先生じゃなくて化け物って呼ばれたけど  
羽鳥とも呼んで「じゃ〜ねえ〜」」

化け物の言い分を無視して俺は部屋を後にした。

くいくい。

何かが俺の裾を引っ張っている。

ま、まさか化け物が怒って俺を殴りに！

いや、無いか暑苦しくないし。

じゃ〜考えられるのはチビか！

なんでこっちきてるんだ？

振り返ってみると

「ひ、輝！？なんでこっちにきてるんだ？」

「いおりくんといっしょにいたい。」

う、嬉しい事言ってくれるじゃないか

礼でも言ってやるべきか？どうする俺。

言っとくかなんてったって俺が嬉しいんだから

「輝ありが「すうーすうーすうーzzz」」

寝てる！

屋上のフェンスに寄りかかって寝てる！

すごいよ超人技だよ！

「どうすんだよ。俺輝の家分らないぞ。」

こんなところで寝てたら風邪ひくから  
とりあえず家に運ぶか。」

「すうーすうーzzzz」

性格は最低かもしれないが

俺にとっては最高の友達だから  
風邪ひかれても困る。

「すうーすうーKILLZZZZ」

「!？」

## 第七話 生命の危機？

家に輝を連れてきて気がついたことが二つある。まず一つ寝てる女を家に連れ込んでいる俺って危険人物じゃないか！

化け物かチビに任せとけばよかった。

クソッ。

失敗した。

次に気がついたことはアイツにはれたら俺が殺される。

輝をどこかに隠さなければ！

「いつちゃん、ただいま。」

かつ、カエツテキター！！！！

アイツが帰ってきた〜！！！！

とりあえずふとんに包めて隠すか。

俺は輝にふとんを包めリビングの隅に置いといた。

「いつちゃん、そのふとんどうしたの？」

バレター！！

そりゃそうだよな！

リビングの隅にふとんがあったら疑問に思うよな。

「いや〜。なんでもないから気にしないで。」

く、苦しい〜

「ん、分かった。」  
「疲れたたる風呂入ったら。」  
「いや、まだ五時なんだけど。」  
「じゃ、シャワーだ。」  
「だか「うつせー早くいつてこい。」  
「ひどいよ、いつちゃん。」  
「兄貴いい加減いつちゃんって呼ぶのやめて。」  
「無理、いつてきまーす。」

さっきの奴は俺の兄貴だ。  
音ノ葉 仁（おとのは じん）  
大学一年生の優しい兄でも  
なぜか俺のことをいつちゃんって呼ぶ。  
悲しいかな兄弟愛。

「ん。ここはどこだね？伊織君。」  
「うを！起きた！起きたなら早く出て行け。」  
「なんだね、いきなり？部室にいたはずだが？」  
「化け物が輝に酒飲ませて酔ったんだよ。」  
「そうか。ところで後ろの人は誰だ？」

まさか！兄貴が後ろに！

「ち、ち、ち、ち、違っんだ！  
これには、深い訳があるんだよ。」  
「なにを慌ててるんだ？伊織？」

この声は！

「愛華！これは、兄貴には秘密な！」

「わかった、ただテメエが腐っているってことが。じゃ、部屋いって勉強してるから。」

今のひどい子は俺の妹の音ノ葉 愛華（おとのは あいか）  
中学三年生の俺の妹なのにクールカッコいいなぜ？

しかも、家族には、いつも冷たいの。  
これが反抗期なのね。

「ま、良い。とにかく出て行け輝。」

「もう少しゆっくりにしていけよくらい言えないのか？」

言いたいけど。

兄貴にばれたら殺されるんだってば！

「ま、伊織にも用事はあるだろうから  
とりあえず退散するか。」

よっしゃーーーーー

「では、おじま」じゃね。」

ボタン

ガチャ

扉を閉めて鍵をかければ安全さ

「いつちゃん後で説教な。」

.....!!!!!!

「¥#%!&amp;mp;:~(〓|?<~\*A!”  
「最初からばれてたから。」

その後、兄貴の部屋で五時間の説教をもらったのは  
言うまでも無いか・・・

クソッ

悲しいな兄弟愛

## 第八話 俺が異常？

深夜一時

俺はヒザの痺れが抜けずに眠れずにいる  
暇だからつまらないニュース番組を見ている。

「ただいまお母さんが帰ったわよ。

って言ってもみんな寝てるんだけどね」

「おかえり母さん。」

「チツ、起きてたの伊織？」

今舌打ちしなかった？

帰ってきたのは俺の母さんの音ノ葉 愛（おとのは あい）  
母さんは妹に似ている  
というより妹が母さんに似たんだな。

「実の息子に舌打ちとは、ひどくない？」

「あら、あなたは橋の下から拾ってきたのよ。」

「え、嘘だよな？嘘だって言っつてよママ！」

「うるせーな黙ってるやガキ」「」

「なんで愛華までそんなこと言うの？」

寝てたんじゃないの？

兄貴にガキつてひどいよ。」

「眠れねえんだよカス。」

『・・・0時24分頃に・・・銃が盗まりました・・・  
・・・警察では・・・』

母さん愛華ひどい、ひどすぎるよ。

ピピピピピピ

俺が悲しんでいると家電の音が空しく鳴り響く

ピピピピピピ

「「とれやゲロ犬」「

「はい、もしも音ノ葉ですけど。」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「どなたですか？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「無言とかふざけんなよ手前」

ガチャ

「どうしたの伊織？」

「無言だった。」

「私眠るよ。おやすみ母さん、兄貴。」

「「おやすみなさい愛華。」「

さっきの無言の電話はなんだったんだ？

迷惑電話か？

どちらにしるムカつく

クソッ。

「ただいま、みんな。」

ちょうど痺れが引いてきたところに父さんが帰ってきた

「おかえり（パパ・父さん）」

「伊織まだ起きていたのか早く寝なさい」

父さんの名前は音ノ葉 和希（おとのは かずき）

やさしい人なんだけど怒ると怖い

仁兄さんより怖い

俺だけがこの家の常識人なんだが

みんなは俺のほうが異常とっている

悲しいな家族愛。

「どうした伊織悲しくもあり怖くもある顔して。」

「父さんが帰ってくるまえに無言迷惑電話があっただね。」

「そうか次あったら俺に変わってくれよな。」

「そうするよ。眠いから俺寝るね。」

「おやすみ伊織。また明日。」

## 第九話 これが現実？

午前5時

「ク、クキヤクガビグロアザジカデアグタカカカカ」

薄暗い部屋に狂喜の笑い声が響く

「やっと、やっと会えたんだよ

君も喜びたまえよ。」

「ひい。」

部屋には目が血走っている男と  
両手両足を縛られた女がいる。

「昨日喜びのあまり電話かけちゃったよ。

そしたらね、君ったら怒鳴っちゃって

僕を楽しませてくれるんだもん。」

男は黒いものを片手に喜んで怖がっている女に  
語りかける。

「今度会いに行こうと思うんだけどどう思うかな？」

ヒタ、ヒタ、ヒタ

「いや、近づかないで

こっちにこないでよ。」

「会いに行くんだったら君のために生け贄を捧げなければ

いけないよね？今捧げるからね。」

ヒタ、ヒタ、ヒタ

黒いものを女に向けて歩いて歩いている男は心底楽しそうだ。

「ころさな。」

パンツ、

乾いた音が部屋に鳴り響く

女の額には穴があいているそこからは血液がでてい

「生け贄はできた。

これで君に会えるよね伊織。」

\*\*\*\*\*

午前7時40分

「どうしても気になるな昨日の無言迷惑電話。」

俺が学校の登校中に昨日の事気にしていたら  
後ろから輝の声が聞こえてきた

「おはよう。どうしたんだね暗い顔して？」

「いや、昨日無言迷惑電話があつてね

それについて考えていたんだ。」

「そうか。でもそんな考える事も無いだろう

「どうせ悪戯だ気にするな。」

そんな感じの話を輝としていると学校についた。  
俺は下駄箱から上靴を出そうと手をかけたら  
死体が腐っているような異臭  
北極にいるくらいの寒気に襲われた。

「なんだ上靴を出さないのかい？」

「いや、出すけどちよつと気持が悪くなったんだ。」

さきに行ってくれ輝。」

「わかった。先生呼んでくるか？」

「たのむよ。」

クソッ

寒気が消えない多分風邪だろう  
保健室にでもよっていくか

俺が下駄箱を空けたら

そこには、人の頭があった

.....

一瞬頭が真っ白になった

嘘だよな。

これは夢だ。

俺は普通の高校生なんだぞ！

事件になんて巻き込まれるわけない

誰かの嫌がらせか？

考えれば考えるほどこれは夢ではないのかって

妄想がまとわりつく

だが俺の考えは女の目を見た瞬間に

現実に戻った。

悲しそうな目。恐怖の目。  
体の中の液体が頭に上ってくる

「うえっ、ごほ、ごほ。」

食べたものが出たり無いのか  
胃液まで出てきた。

「ぼえ、うをえ、ごほ。」

「どうしたんだいお！警察と救急車を呼んできてくれ！  
早く！」

たぶん先生だろう。輝が呼んできてくれたんだろう。  
先生は俺の下駄箱を閉めて俺の背中をさすってくれる。

「大丈夫か伊織？伊織！？」

そこで俺の意識は闇へと消えていった。

\*\*\*\*\*

午前8時

「喜んでくれたかな？喜んでくれたかな？」

薄暗い部屋で男は頭の無い女の死体を抱えて  
笑っていた。

「僕は狂ってない。狂ってなどないんだよ。  
そつだろつ伊織？君が狂ってるんだ」

## 第十話 手のぬくもり？

俺は今闇の中にいる

気絶したとこまで覚えてはいるんだから  
きっとこれは夢なんだ。

俺の目の前に道ができている

『これは進めって言うてるのか？』

まあここにいてもらちがあかないから  
さきに進むか。

道を歩いているとそこには立っている人がいた  
立っている人はこつちをむいた。

そこに立っていたのは輝だった。

『輝がなんでここにいるんだ？』

『ここは俺の夢の中だろ』

俺が話しかけようとしたら急に首から上が無くなった

ごろごろ

俺の脚に何かが当たる

見たくない見たら俺はきつと・・・

俺の意に反して頭が下をむく

そこには、輝の首があつた

目はこちらを向き何かを訴えているみたいだ

「あ、うわわわあああああああああああ  
」

俺の視界にヒカリが戻ってくる

まずは自分が何処にいるのか確認しないと

俺は左右を確認していると  
周りはカーテンそして学校特有の匂いがする  
保健室にいるんだな。  
カーテン越しから声が聞こえる

「では・・・こちらに・・・してください」  
「分かりました・・・これを・・・」

あれは化け物の声だな  
少し安心したなでも輝だったら・・・  
お、俺は何を考えてんだ！  
こんな大変なときに  
あんなことした奴を許す気もないし  
会ったら何発か殴ってやる。

それにしても体が寒い  
化け物がいるなら普通蒸し暑いくらいなのに  
どうしてだろう？

そして、なぜが右手だけがあつたかい  
確認だ確認

見てみると輝が俺の右手を握っているらしい  
寝てるらしく俺が起きた事に気づいたようすは無い  
夢のこともあり俺は輝を抱きしめてしまった

「~~~~zzz、ふあ~~~~!?」

抱きついた瞬間輝が起きた事にも気づかず

「な、な、な、なにやっているんだ伊織！」  
「あゝ、ごめんな安心したくて・・・つい。」

「そうか、なら安心するまでそうしているといい  
大丈夫だ事件の内容は知らないが  
私は今ここにいるぞ。」  
「ありがとう」

俺は安心するまで待とうと思っただが  
そんな俺の気持ちなんて知らない  
無粋な奴はいつてきた

「お前ら先生がいるのにすごい度胸だな。」

クソッ

幸せなひと時を壊しやがって

「伊織放課後職員室に來い。」

「わかりました。」

「輝、伊織三時間目に行つて來い

ほれ、早く。」

「「分かつてるっての行つてきますよ化け物。」」

「だから先生つて」「ガシャン」「」

俺は扉を閉め

輝と一緒に教室に戻った

## 第十一話 必然と偶然？

三時間、四時間目が終わり  
昼飯の時間が来た

まだ俺は悩んでいる。

誰があんなことしているのか  
俺と何の関係があるのか

「・・・おくん・・・伊織君!？」

「うわっ、なに!」

クラスの奴が話しかけてきたが  
友達のいない俺には誰だか分からない  
こういう時どうすればいいんだろう？

「はじめましてだね。伊織君。

僕は君と話したとき無いから

覚えてないと思うよ。

僕は園原 貴也(そのはら たかや)

貴也って呼んで。」

「ああ、よろしく貴也。」

貴也って言うんだな覚えておこう。

貴也は筋肉質ではなくやせ気味で

ちよっと普通の人とは違う空気をまとっている感じかな。

「今日は、大変だったね。まさか君の上履きに

女の人の頭が入ってるなんてね。」

「その話はよしてくれ。飯が食べなくなるだろ!」

クソッ

なんなんだこいつただの野次馬みたいな奴か  
とにかく、ここから離れよう

でない俺はこいつを殴ってしまいそうだ  
ただでさえ俺は浮いてる存在なんだから  
あまり問題は起こしたくない。

「それじゃ、俺はこれで失礼するよ。

お前の事は嫌いになりたくない

だから、この話はしないでくれ。」

俺は貴也の顔も見ずに教室を後にした。

「良いよ、良いよ、僕の思ったとおりだ

最高に良い、もっと僕を楽しませてくれよ伊織君。」

貴也は伊織と話せたことに狂喜していた  
だが、その声は伊織には届いてなかった。

「そろそろ、本番だよ。」

## 第十二話 矛と盾？

放課後 職員室

「伊織は誰にも怨まれることはしてないんだな。」

化け物は事情聴取をはじめた

「俺は十七年か友達なんていないんですよ！

誰かに怨まれる事なんてある分けない！」

「そう怒るな確認だよ。」

「そんなことはどうだっていいんですよ

今日の朝の事輝には言っただんですか？」

「いや、誰にも言ってないが

あの場にいったのは

この俺だからなあそのまま閉めて警察に渡したよ。」

ああ、輝が呼んだ先生は化け物だったのか

いや、待てよ今化け物はなんていった？

「おい、さっきなんて言った！！！」

「あの場にいった」「そこじゃねえ！その前だよ！！！」

「朝の事は誰にも言っただけよ。か？」

嘘だろ。

だったらなんで貴也が知ってたんだよ。

おかしいだろ遠目から見たって性別なんて分かるわけ無いだろ  
あいつは、『君の上履きに女の頭がはいつてるなんて。』

言っただぞ。

まさか、いやそんなことある分けない  
ただの高校生が人を殺すなんて

「ああ、まだ確認したい事あるから

お前銃なんて持ってないよな？」

「ごめん用ができたちよつと帰る。」

「おい、待てしつても「銃なんてもってねえよ。」

俺は職員室を出て駆け足で教室に戻った。

おもいきり扉を開け

「貴也あああ！」

クラスの奴は驚いてこっちを見ていたが

俺は気にせず近くに近くのクラスメートに

貴也の居場所を聞いた。

「貴也はどこにいる？」

「貴也君なら輝さんと一緒に屋上に行ったよ。」

クソッ

なんで輝までいるんだよ

こうしてはいられない

俺は急いで屋上に行った。

「ハア、ハア、貴也！？」

「遅かったね伊織君。」

貴也は笑顔で俺を見ている

ただそこにはおかしいところがあった

貴也は右手で銃を持ち  
輝の頭に銃口をむけていた。

### 第十三話 俺の武器？

「なんでだよ！何でこんな事をしている！」

「つまらない質問をしないでよ伊織君

僕は君の大ファンなんだからさ。」

なにを言っているんだ貴也は

俺の大ファンだからこんな事をしているのか？

だったら尚更許せない

「伊織逃げなさい私の事はどうだって良いのよ

私をおいて逃げなさい。」

「君は黙っててよ君は伊織君を呼ぶための

餌だったんだからさ。」

パンツ

貴也は輝の右足を銃で撃った

「くっ」

「手前えそれ以上輝に何かやってみろ

ぶっ殺すぞ！」

俺は貴也を睨んだ

「ク、クキヤクガビグロアザジカデアグタカカカカ

良いよその目でももつと良い目してくれないかな？

しないとこの子殺しちゃんぞ。」

なんだこいつは本当に高校二年生のガキか？  
俺は怖くなって逃げたい気持でいっぱいになった  
足は震え齒はがちがち小刻みにリズムを奏ではじめた

「に、逃げなさい

お願いだから逃げて。」

「うるさいって言うてんだよ。」

僕は今伊織君に話しかけてるんだよ！」

「やめ

パンツ

貴也は輝の左足を撃った。

「くっあああ。」

輝はその場に倒れ小声で何か言っている

「お・・・い・・・にげ・・・

おねがい・・・げて

おねがいだからにげて。」

足を撃たれているのにまだ俺の事なんか気にしていた

「ク、クキヤクガビグロアザジカデアグタカカカカ

馬鹿だなあ〜おとなしくしていたらすぐに楽になったんだけど

あれえ〜次何かしたらどうなるんだっけ？」

自分の命が危ないのに俺のこと気にしてくれる奴を  
初めて友達になってくれた奴を

裏切って逃げるようなカスはここにはいない！

「次ぎ輝になにかしたら手前を殺すっていったんだよ！」

「良いね良いねやっとな僕を見てくれるんだね

この邪魔者はもういらぬから消えて。」

俺は貴也が右手に持っている銃めがけて上靴を投げた

パンッ

ギリギリ輝から銃口が逸れて当たらなかつた隙に

俺は輝を背負って部室に走つた

「ちょ！なんで？なんで？まだその子を見ているの？

僕だけを見ていればいいんだよ」

パンッ、パンッ

怒りでのが定まらない貴也を無視して

俺は輝を部室に放り投げて鍵を閉めた！

カチャ、カチャ

貴也の銃弾が切れたんだろう

俺は不思議と恐怖が消え笑っていた

「貴也お前だけ見てやるよ

反撃開始だ！」

俺は貴也に突っ込んだ

## 第十四話 反撃？

貴也が銃の弾を変えようとする前に  
俺は右足で貴也の鳩尾を蹴り  
屈んだところに右手で鼻を殴った  
左足で銃を持っている右手を蹴って  
屋上から落とした

グシヤ

「ああああああ！僕の鼻があ！鼻がああああ！」

どうやら鼻を折ってしまったらしい  
でも、輝にしたことに比べたら  
そう思うとまだ怒りはおさまらなかった。

パンッ

「なっ！」

右手が燃えるように痛い  
なんで銃は屋上から落としたのに

「僕は銃を一丁しか持ってないなんて言っていないよ  
油断大敵だよ伊織君。」

「貴也デメエ！」

鼻を折ったはずなのに貴也は笑っていた  
目は血走っていて

「ク、クキヤクガビグロアザジカデアグタカカカカ  
僕の銃の音しっかり聞いて耳に刻んでね。」

パンツカチャ、パンツカチャ

小さな音だがさっきの銃とは違うようだ  
今の二発は試しうちなのか  
空に向かって撃っていた

貴也の銃口が今度はこっちに向いた

パンツカチャ、パンツカチャ

俺の右足と腹部に二発撃ってきたが

俺はギリギリで避けて

貴也に突っ込んだ

「チツ、同じ事が二回もくらうわけ無いだろ。」

右足の蹴りがはずれたが

俺も馬鹿じゃない同じ攻撃なんてする分けないだろ

「なっ！」

俺は撃たれた右手に力と体重をのせおもいきり  
貴也の顔面を殴った

「ぐふぁ！クソッ！」

なんでまだ攻撃してくるんだよ！

お前の右手を撃って

僕は銃を持っているんだぞ。」

俺は貴也の質問を聞いたら  
ちよつとアホみたいな顔したのかも

「なに不思議がってんだよ！

僕は殺しの道具持ってんだぞ！」

「あたりまえのこと聞くなよ

俺を失望させるなよ貴也は俺の大ファンなんだろ？

自分で答えを導き出せよ。」

「あの女のためなのか？」

フッ

「お前は僕の物なんだあああああああ！！！」

馬鹿馬鹿しい

俺が死んじまった輝の迷惑かけちまうだろ

後、科学部の今後の活動も気になるし

俺は貴也が銃を構える前に

右足で銃を吹っ飛ばし

右手で貴也にアップパーをくらわせた

「ぐっうあああ！」

俺は貴也に勝つたんだ

## 第十五話 勝利の敗北？

「良いこと教えてあげるよ伊織君

あの女に撃った銃弾は貫通しているから  
応急処置するだけで大丈夫だよ。」

「そうか、まだいっぱい殴ってやりたいが  
輝の怪我の処置をするのがさきだから  
お前にかまっている暇なんてない。」

俺は救急車と警察に電話して

輝のいる科学部の部室に足を向けた

「伊織君あまいなあ」

僕に目を背けちゃダメだよ。」

俺は貴也の声に反応して後ろを向いたが

そのときには遅く

屋上のフェンスを登り外側にいる

「また会おうね、僕は伊織君の大ファンなんだから

君の目の前に何度でも現れるよ。」

「貴也あああああああ！！！！」

貴也は屋上から落ちた

走って下を見たが木々で貴也の姿は見えなかった  
クソッ

こんな終わりがたつてありかよ

俺は悔しかったが

輝が傷ついているのを知っているから

部屋に急いで向かった

「輝大丈夫か？すぐに傷口ふさぐからな。」

「傷が治ったら覚えている伊織。」

「ああ、覚えているから死ぬんじゃないぞ。」

俺は傷口に自分のシャツを切って撃たれたところに  
きつく縛り付けた

ピーポーピーポー

救急車がついたのか  
クソッ

なんか、頭がくらくらしちゃった

これで俺が死んだら輝は泣いてしまふのだろうか？  
結局科学部はなにするところなんだろう？

そんなくだらない疑問しか頭に思いつかないや

「君……すぐに運んでくれ……」

俺が意識を取り戻した場所は真っ白だった

そこには、母さん、父さん、兄貴、愛華がいた  
普通は息子を心配するはずなのに  
みんなは怒っている様子だった

「「「「おい手前が死んだら誰が泣くと思ってんだよ  
少しは自分の体のこと気にしやがれ」「」「」

さすが家族ハモっているよ  
怒られているのに俺は不思議と笑っていた

「ただいま、みんな。」

## 第十六話 現状？

「何がただいまだよ。クソッ心配して損した。」

「父さんと母さんは仕事行って来るな。」

「くれぐれもたのんだぞ。仁、愛華じゃあな。」

「行つてらっしゃい。」

そついうと母さんと父さんは病室を出て行った。

「愛華あゝ輝の様子はどう？」

「今はおとなしく寝てるわ。」

「そつ今はおとなしくな。」

「えっ！どついうこと！！」

兄貴、愛華！」

二人はそつぽむいて俺の話なんて聞きやしないが  
なぜか俺の背中では冷や汗だらだらである。

俺は怖くなつたので話を変えた

「俺はいつ退院なの？」

「明日だよ。」

「明日！早くない？」

「輝さんもお前も銃弾が貫通していたから

大事にならなかつたんだ。

だから明日退院。

学校では気をつける復讐くらつぞ。」

復讐？まだ敵はいるのか？

「仁っ復讐ってなに！？まだ「輝ちゃんからだよ。」  
「ひ、輝から！？なんで。」

あ、ちよつと声が裏返ったかも

「だから言つたる今はおとなしいって。」

「兄弟団欒のところ悪いが伊織君を事情聴取させてもらつよ。」

病室に場違いなおじさんの声が聞こえた。

「では、俺たちは外で待つてます。」

兄貴と愛華は病室を後にしたのを確認して

おじさんは俺に話しかけてきた

「私はこういうものだ。」

おじさんは名刺を渡してきた

おじさんの名前は江戸島 智親（えどじま ともちか）  
警察官のようだ

俺は警戒心剥き出しで江戸島さんにはなしかけた

「警察官が俺に何のようですか？」

「君は園原 貴也と共犯かね？」

「そんなわけないだろ輝が怪我したんだぞ！！」

「そんな奴と俺は一緒にいられない。」

「すまない、ただの確認だったのだが  
そういつてくれて嬉しいよ。」

「なんでそんなこと聞いたんですか？」

「君の証言では園原は屋上から飛び降りた」そうです貴也は飛び降

りたんだ。」「

「だが死体が見つかってないんだよ。」

なに、アイツは飛び降りたんだぞ屋上から  
それなのに死体が見つからない  
もしもそうだとしたら貴也は死んでない

「混乱するのは分かるが死体がないなら死んでない。

もしかすると、また君とぶつかる時がくるだろうね。

私は捜査をに戻るよ。何かあったら連絡してくれ。」

クソッ

なんなんだこのやりきれない気持ちは

また、貴也とぶつかる時

そのときは貴也を刑務所にぶち込んでやる！

俺はそう心に刻み輝の病室に足を運んだ

「怪我はだいじブファ！」

「大丈夫かじゃないだろこの馬鹿者！」

私は逃げると言っただはらずだ

なぜ逃げなかった！」

入ってきた瞬間マクラ投げて来る奴がいるか？  
せっかく心配してきたのに

「輝が心配だったんだよ。しょうがないだろ。」

「しょうがなくなかないわ！」

もし伊織が死んだらどうするつもりだった？」

「俺の命より輝の命のほうが大切だと思って。」

「思わなくて良い！」

なんでこんなに怒っているんだよ  
訳わかんねなあゝ女って生き物は不思議だ

「はあゝ。もうこんな無茶はするな、いいな！」  
「なんでぞ」「いいな!!」

有無を言わせない迫力だ

「罰として足が使えないから  
その手助けをしる。」

「はあ?どんなこと?」

「階段上るときにお姫様抱っことが  
車椅子動かしたりとか

足が治るまでやれ。」

「いやいやいや。無理だつて。」

「責任があると思うならやれ。」

「ううゝ。分かった。分かったよ。」

「学校でもするんだぞ。」

「え?」

俺が疑問を返す前に輝は着替えるといつて外に出しやがった  
いや、俺が出て行ったんだけどね。

クソッ

俺が輝に出会ったのって不幸だったのかな?

## 第十七話 憂鬱な平和？

俺と輝は病院を退院した

学校の登校中周りから

クスクス笑い声が聞こえるんだが

「こういうの女にたのむものじゃないか？」

「女子じゃ力不足です。」

男なのだから愚痴ってないで

さくさく進む！」

なんで輝はいちいち怒鳴るんだろう？

昨日からずっとこの調子なんだよな

「青春ですねえ〜お二人はあ〜。」

「ぐっちー！？これは違うんですって

輝が怪我してるから仕方がなく

やってることなんです！」

「輝ちゃんを怒られちゃダメですよあ〜。」

チビ余計なこと言うんじゃないよ

そして、なんで輝はさっきから前で

ブツブツ文句言ってるんだよ！

俺は悪いことしたんですか？

学校の下駄箱についたが俺は自分の下駄箱を使ってない

輝のを借りている（借りれる奴が輝しかいなかったんだけどね）

「ほれ、靴を上靴に替えてやるから

足を上げる。」

「変態。」

「もう変態でもいいから」

俺は輝に無理矢理上靴を履かせ

階段に向かった

第一の難関<お姫様抱っこ>

今までののは別に問題無いことだったが

これはやばい

あ。そういえばまだチビがいたはずだ

「ぐっちー」女子にやらせるなんて最低ね。」「

「なあゝにいゝ。」

「なんでもないです。」

クソッ

俺はしょうがなく輝をお姫様抱っこして階段を上った

ヒューヒュー周りから言われているが

もうヤケクソだ！

車椅子はチビに持たせた。

やっと階段を上りきり

教室に向かった

「これが直るまでずっとつて。」

「何か言った？」

「いえ、何も。」

「永遠にやらせるわよ。」

俺は輝の脅しを無視して

自分の教室に入り自分の机で寝た。

その後、化け物にホームルーム馬鹿にされた事  
は言わなくても分かるよね

## 第十八話 新入部員？

授業を全部終わり放課後になった  
俺は輝の車椅子動かして  
屋上に向かっているところだ

「なあ〜部活って何やるの？」

「また、お茶会とかじゃないよね？」

「ぐつちーに呼ばれたから

私にも分らないわ。」

階段はお姫様抱っこして進み  
茶化す奴は睨んで無視して  
体力気力がきれそうだ

「屋上まであと少し俺ファイト！」

「何自画自賛してるのよ気持悪い。」

「うるさい。しばくぞー！」

「足が動かない女の子をしばくなんてひどいのね。」

涙が出てきたようすればいいんだろう？  
なんでせつかく運んでやってるのに  
こんな仕打ち受けなくちゃいけないんだ

「半分冗談よ。」

「半分本気なのかよ！」

「どこらへんが冗談なのか？」

「気持悪い、ひどいは」

そこは冗談なんだほっとするぜ

「本気後は冗談。」

「悪口だけは本気なのかよ!!!」

喋っているうちに屋上に着き  
部室に入った

「「きましたよぐつちー。」

「ああ〜よくきたねえ〜。」

その場にいたのはチビと化け物  
あと一人いるが見知らぬ人だった

「この人はあ〜新入部員ですよ〜。」

「俺以外にも入った奴いるんだ。」

「なにかあ〜いったあ〜?」

「いえ、何も。」

どうせこの新入部員も強制的に入らされたんだろ  
可愛そうに。南無

「はじめまして一年C組の佐多 南斗（さた みなと）です。」

「「よろしく佐多君。」」

「この部活には興味があったので入りました。  
主に活動はなんですか？」

「嘘だろ。自分から入るってありえない。」

「うるさいわよ、伊織

活動は今発表するはロボット作りよ。」

「は?」「「あ〜。」」

ロボットそんなファンタジーなモノ作れるのかよ

「今日から作ります。」

## 第十九話 役割分担？

「ロボット作りの分担を決めるわ。」

分担つても俺は機会作りなんてできないしな  
化け物もまず無理だろう。

「私とぐつちー南斗君はできるかしら。」  
「できますよ。」

なんでチビができるんだよ  
一年生もできるし

あ、待てよなんか足りなくない？

「俺が入ってないんだけどどうして？」

「あなたは作れるのかしら？」

作れないなら言わないでよね。」

「はい、作れません。」

なんでこんなに冷たいんだ  
最近ずっと冷たいんだよね。  
いいや別にもう。

「後、南斗君敬語はよして

みんなも敬語使っていないから。」

「わかった。使わないよ。」

なんか軽い奴だな  
大丈夫なのか？

「じゃ、材料はあるから作りましょう  
化け物と伊織は食べ物買ってきて。」  
「だからせんせ」いってきまーす。」

俺は化け物を引っ張ってコンビニに行った  
道中化け物に質問をずっとした

「ロボット作りっていつ決まったんですか？」

「知らん。」

「なんでぐつちーじゃなくて輝が部長なんだ？」

「知らん。」

「なんでなんもしらねんだよ。」

「知らんものは知らん。」

クソッ

こいつ馬鹿だろ絶対

コンビニでかご二個分の料を片手で持っている  
化け物を見てそう確信した。

「ただいま。」

「ご苦労様。だいたいできている

そこでじっとしている。」

「分かった。」

輝はチビと南斗と一緒にもくもくと  
作業に取り掛かっている

「俺は帰る。」

「なんで手前が帰ろうとしてるんだよ

顧問だろ。」

「居残りみたいで嫌だ。帰る。」

そう言い残し化け物は帰っていった

「あなたたちも帰りなさい

ぐっちー、南斗。」

「お先に失礼します。」

「え！なんで俺の名前は無いの？」

「伊織は残るの、分かった！」

怖いよ輝がこんなに怖いなんて思わなかった  
俺南無

## 第二十話 二重の心配？

深夜0時 学校の屋上

なんで俺は家に帰れてないんだ

輝の奴ふざげやがって何が目的なんだ

ま、家には遅くなるって連絡してあるけど

「伊織なにふてくされてるのよ。」

「帰れないからだよ。それ以外にあるか？」

「話があるから残したのよ

それぐらい察しなさいよね。」

お、俺に告白か？

輝も女の子らしいところあるじゃないか

だが、俺はみんなのものだ輝の気持ちには答えられない

「なにニヤニヤしてるのよ気持ち悪い。」

「で、話って何だよ？」

ま、脳内冗談はこれくらいにして

真面目に話を聞くとしようか

「なんで逃げなかったの貴也は銃を持ってたのよ？」

「また、その話かよ、真面目に答えて。」

「真面目に答えてるだろ！」

俺の答えの何が気に入らないんだ！！」

「全部よ全部。」

どんな答えを求めているんだ輝は

俺にはなにも分からない

聞いたって答えてくれないしな

俺が考えていたら輝は答えが返ってきた

「私はそんなに弱くない！」

あんなんかに守ってもらうほど

私は弱くないのよ！！」

「輝！？」

輝は泣いていた

弱々しく子供みたいに

俺はその顔を見た時に自分が何で守ったのか分かった

「俺の初めての友達だからかな

俺にとっての友達は信じあえて助け合うものだと思うんだ。」

「そんな理由で助けたの！」

くだらなすぎるわ！」

「まだ、話は終わってないけど聞いてくれるかな？」

輝は小さくうなずいたから俺は話を続けた

「たぶんだけど俺は輝のこと

友達として好きだと思うんだ。」

「それだけかしら？」

「まあ、それだけ。」

小さい声だけどなんとなく「ありがとう」って  
聞こえたような気がする

「帰るわよ。」

「わかったよ。」

俺はお姫様抱っこで階段を下りて行って

## 第二十一話 完成と未完成？

土曜日 午前六時

『ロボットが完成したから

部室に来て。拒否権は無いわ。』

そうメールで言われ俺は起きた

ぶつちやけメールの着信音で目が覚めちゃったんだけどね

俺は部室に向かった

部室ではすでにチビと化け物、南斗がいた

朝早くからご苦労な事だ

「みんないるわね

これがロボットよ。」

「すげえ。」

驚くのも当然だが

ロボットといわれたものは人間にしか見えない女の子だった

髪は長く青色で体もスラッとしている。

だが、おかしいところも多々あった。

頭にはイヤホンみたいなのがついており

目や顔には感情と言うものが無かった。

「形は完成しているけど

中身が未完成なのよね。」

「どういうことだ？」

「伊織も薄々気がついてるんじゃないの？」

「感情が無いんだな。」

「正解よ。」

正確には、常識や感情、人の心が入ってないのよ。」

輝が言っていることは全然分らないが

こいつには人の心が入ってないことなら分かる。

「……それで……伊織に任せるわ。」

「は？今なんて言ったの？」

「だから、ロボットに人の心をプログラムするために  
伊織と一緒に行動させるって言ったのよ。」

はあ???

なんで俺がロボットと一緒に行動せにゃあかんの？

「嫌だ。絶対無理。」

「伊織には拒否権は無いわ。」

そうだった。輝に拒否したって意味がないんだっただとすると俺はロボットと一緒に行動したら  
兄貴に殺される！

「他に任せられないのか？」

「無理ね。大丈夫よ私が何とかするわ色々。」

信じて良いんだよな輝？

俺は死にたくないぞ。

「友達を信用して伊織。」

「分かった輝を信用するぜ」

頼んだぞ。」

「頼まれたわ。」

俺はロボットと一緒に行動する事になった

## 第二十二話　かく？

土曜日　午後一時

俺は家に帰ってきたらいきなり兄貴に回し蹴りをくらった

「いでえ！」

「誰だよその子？」

攫ってきたんじゃないだろうな？」

兄貴、俺のことどういふふうに見ているか良く分かったよ  
ああ〜どうすっかなあ〜

どんなこと言っただて意味がなさそうなんだけど

「すみません仁さん

これには理由があります。」

後ろから輝の声が聞こえた

そういえば危ないから連れてきたんだった

兄貴の回し蹴りで記憶かとんじやった

てへ

「あれ、君はあの時の子だね？」

「輝だよ覚えといてね。」

「輝ちゃんね覚えとくよ

で、理由ってなにかな？」

「それはですね（省略）」

「へえ〜そういうことが分かったよ

いおちゃんしっかり面倒見るんだよ。」

え！

省略でなにが分かったの？  
兄貴ってエスパーだったけ  
てか省略ってなんだよ！！

「で、この子の名前って何かな？」

兄貴はロボットを指差して聞いてきた  
名前なんて聞いてないな

「伊織が決めて

面倒見るのあなたなんだから。」

「俺かよ！

楽（がく）ってので良いんじゃないか？」

「「楽？」」

「楽しいとかって意味まんまだけどね。」

「それでいいわよ。」

「じゃ楽を起動させるわね。」

うなじにあるボタンを輝が押した

てかうなじにボタンがあるなんて始めて知ったぞ  
なんで俺ばっか説明が無いんだよ！

「プログラムで名前は設定したわ

じゃ頑張ってるね伊織。」

輝はそう言って帰って行ったが

楽は本当に動くのだろうか？

俺が疑問に思っていると

楽が口を開いた。

「あなたが親ですね確認しました。」

親は疲労が見えますがどうしましたか？」

親って呼びやがったぞ

俺はまだ十七の高校生だって言うのに  
ふざけやがって

「親は怒っているように見えますが。」

クソッ

これからの面倒大変そうだな

第二十二話 かく？（後書き）

感想とかあれば嬉しいです

## 第二十三話 一般常識？

「楽たのむから親じゃなくて伊織って呼んで。」

「分かりました。」

命令にしたがい親のことを

伊織と呼ぶようにプログラムしました。」

ダメだこりゃ

楽に一般常識を教えるのは非常に難しいな

そんなこんなで楽としゃべっている

いろんな意味で危ない奴が帰ってきた。

「ただいま〜お父さんが帰ってきたわよ〜ん。」

「きもいから父さん

オカマ言葉なら外でやってね。」

ナイスだ愛華

そのまま毒舌で父さんを黙らせてしまえ！

「あらあら女の子がそんな汚い言葉使っちゃダメよ。」

「いい大人がオカマ言葉使うのも考え物だな。」

確かに父さんがオカマ言葉使うのはどうかしている

頭のねじ二、三本外れてるんじゃないかな？

「なら大人なんてやめるわ。」

あたし子供になってあげるんだから。」

「私だつて女やめてやるわ

男になつたから汚い言葉使っても良いよね

「手前が子供ってきもいんだよ！」

愛華それはおかしいぞ！

頼むから女の子のままできてくれ

お兄ちゃんも男になった愛華見たら泣いちゃうぞ

「二人とも玄関で何やってるの？

早く中に入りなよ。」

兄貴空気読めよ！

後少して父さんを家から追い出せたのに

「それよりいおちゃんが女連れ込んでるから。」

あれ？納得してくれたんじゃないのかな？

なにか怒ってる様に思えるんだけど

俺の気のせいだよね！

「なに！」

伊織が女を連れ攫っただって！！」

「そんなこと言ってねえから。」

「家族会議をしようじゃないか

伊織抜きで。」

俺抜きってふざけてるよね

それでもお前は父さんか！！

「「分かったよ」「」

お前らも納得してんじゃないやねえよ

ダメだお前らに常識を教えんのは  
ロボットより難しそうだな。

今の俺って不幸だよな。

## 第二十四話 え！これ夢落ち？

俺が目を覚ましたら  
知らないところにいた

「伊織早く起きなさい！

いつまでそうしてるの！」

俺に怒っているのはなんと昨日あったばかりの  
ロボットの楽だった。

「え！なんで

ここはどこ？」

大体なんで楽が怒っているの！？」

「は？何言っているのかねこの子は？

早くやることやりなさいよ！」

楽ってこんなに感情がある子だってけ？

そもそもやることってなに

意味が分からないんだけど？

「ぼさつとしてないで早く牛のお世話をしなさいよ！」

牛？なんのことだ？

俺が牛を飼っているなんて初耳だぞ

とりあえず俺は牛がいると思われる小屋に向かった

「モーモー。」

モーモー鳴いていたのは化け物だった  
ありえないこんな事あつてはいけない  
考えてみる筋肉ムキムキの奴が牛のマネしてるんだぞ  
キモイだろ。

「おい変態何してやがる

大体ここはどこなんだ？」

「モー？」

「いつまで牛のマネしてるんだよ！

キメエんだよ。」

「モーモーモー！？」

こいつモーモーしか言わないぞ

何だつてんだよまつたく

楽はなんか普通に喋ってるし化け物は牛のまねしかしないし  
俺は朝飯を食いに家と呼べるもの？に戻った

「あの牛はダメだねもう売りに出しちゃおうか

伊織高く売ってくるんだよ！」

「どこに行けつて言うんだよ。」

「街に決まってるだろ馬鹿だねお前は。」

もういろいろとおかしいけどスルーする事に決めた

飯を食い終わったら楽の言うとおり街に行く事にした

化け物の首輪？を引つ張りながら

「いやこれだけはスルーできないから！！

なんで筋肉ムキムキの変態を首輪をつけて赤ちゃん歩きで

歩かなくちゃいけないんだよ！！！！！！」

「モーモー？？」

「何を騒いでいるんだい君は。」

俺が化け物に怒っているのに  
喋りかけてきているのは南斗だった。  
こいつは何のマネしやがるんだ？

「君その牛とワシのマメを交換しないかい？」

「先輩にむかって君なんてふざけやがって  
おかしいだろ牛とマメじゃ価値が違うだろ。」

「このマメは普通のマメじゃないんだよ

魔法のマメなんだ。」

「魔法？マジック？ハッ！」

馬鹿なこと言ってるんじゃないぞ

「こんな詐欺今時ババアにも通じないぜ！」

「良いから交換したまえ。」

俺から奪うようにして化け物とマメを交換した  
南斗は化け物と一緒に消えてしまった

「何だつて言うんだよ。」

俺は街に行く気が無くなったから家に帰り南斗の言ったとおりマメ  
を埋めた

それから三分程度経った瞬間ニヨロニヨロと芽が出てきてしまった  
芽は天に届いている感じだったので  
俺は興味本意で芽を上っていった

上ってみると雲の道ができており

俺の百倍くらいある家が建っていた

中に入っていると俺よりも百倍デカイ輝がいた

「あ！伊織こんなところにいた  
今踏み潰してあげるからね。」

踏み潰すだつて!?

嘘だよなあんなデカイのに踏み潰されたら死ぬって  
そう考えているうちに輝の足が俺に伸びていった

「おい！やめっ！いやあああああああ！！」

なんだつてんだ！今は呪いか呪いなのか！！！！  
クソッ

変な夢見せやがって殺す！絶対殺す！！

「スウー スウー。」

腹が重い楽が俺の腹をマクラとして使つてやがった  
楽がああ夢見せやがったんだなコノヤロ  
あれ？楽って俺のベットで寝てなかったけ  
ロボットのくせに

「ねぞうわっつっつっつるううううううう！！！！？」

楽はニヤニヤ微笑んでいやがった



なんで化け物が先生になれたのか疑問で仕方が無い  
頭悪いし性格悪いし存在がうざいし

「伊織の意見に一票するわ。」

「なんで俺の心読めたんだよ輝。」

「なんとなくよ。」

授業を一通り終えて放課後

「今日は部活無いから一緒に帰るわよ。」

「い「拒否権はないから。」」

いつか輝をギャフンと言わせてやる！

「ギャフン。」

「楽は何言ってるのかしら？」

「いえ、なんとなく言っただけです。」

なんで二人は俺の気持ちを簡単に読み取れるんだよ！

普通の男友達がほしいな。

できるかな？できたら良いな

やべなんか涙が出てきた。

「大丈夫よできるわ。」

「何言ってるんだよ？」

「なんとなくよ。」

上を見て歩こう涙がこぼれないようにしよう  
涙なんか見られたら恥ずかしいからな

涙がこぼれないうちに家についた  
心なしかホツとしたような感じだな。

「ただいま。」

「ただいま帰りました。」

「おじやまします。」

三人で俺の家のリビングに行った  
どうやって兄貴を説得するんだろう

「おかえりなさい、いおちゃん、楽ちゃん  
いらっしやい輝ちゃんゆっくりしてね。」

そもそもこの問題をどうやって解決するんだろう？  
輝の考えている事が分からなくなっちゃったよ。

「今度からいおちゃんの帰るところ変わるから  
駅の近くかな？」

「「は？」」

何言ってやがるんだ兄貴は？

「昨日の家族会議で決まったからよろしく。」  
「なんでなの？」

「楽ちゃんと一緒に暮らさない

お前らがイチャイチャしてるとお兄ちゃん嫉妬で狂いそうだから。

「

「兄貴気持ち悪いから。」

「輝ちゃんは何か用なのかな？」

「私も一緒に住む事にしますよろしいですか？」

輝も何言っつてやがるんだ？

同棲ってことになるんじゃないかな？キヤ

俺うざなにがキヤだよ馬鹿じゃないのか？

「うん別にいいよいおちゃんがいいなら。」

「俺が決めるのかよ。」

「当たり前だろいおちゃんの問題なんだから。」

「い（拒否権は無いわよ。）」

輝の目からそう伝わってくるんだけど  
拒否したら殺されるだろうな。

「わかったよ！一緒に住むよ。」

「じゃ荷物まとめてよね。」

俺は荷物をまとめて新居に移った  
クソッ

めんどくさすぎる

## 第二十六話 ずれていく？

駅の近くのマンションに着いた  
マンションは四階建てで

俺の住むことになった部屋二階の一番左端だ。

中はまあまあ広いかな

お風呂もあるしトイレもある台所もある

「うーリビングがあつたとしても

残っている部屋は二個しかないな。どうする？」

「楽と輝が使えばいいじゃないか。」

「いや、楽には人間性がほしい

だから伊織と私は一緒に部屋に決定した。」

は？ふざけんなよ

何で俺が女と一緒に部屋なんだよ

別に付き合っているわけじゃないんだけど

一緒に暮らす時点でおかしいんだよ！！

それでも妥協したのに

一緒にの部屋だなんて馬鹿なのか輝は？

「無理無理絶対無理だつて！！」

「無理なわけないだろおかしなところでもあるのか？」

「全体的におかしいんだよ！？」

なんで気づかないの輝はそれでも女なの？

恥ずかしいとかないの？」

「無いな「なんでだあああ！！！！！！」

やべつつい大きな声出しちゃったよ  
でも輝にはそれぐらいで十分だよな  
十分だと信じたい

お願いします神様輝にはそれぐらいで十分だと言ってください

「なんでもだよ。」

「……………」

俺が馬鹿なのかな？

それとも輝が馬鹿なのか？

絶対馬鹿なのは輝だよな！！

こうなったら楽に分からせるか

「楽は輝と一緒にいいよな？」

「いえ人間性を求められてるんですので一人が良いかと思えます。」

「なんでだあああああ！！！！！！」

「なんでと言われましてもそれが得策だと思いました。」

ああああああああああああああああ。

ダメだこいつら絶対ダメだ。

お嫁にだっていけないよプライバシーって言葉分かんないんだろうな  
もういいよ……あきらめたよ。

「じゃあお隣さんに挨拶に行くか。」

「そうだな。」

「そうですね。」

俺は二人と一緒に暮らすことになった

男としては最高だけと

俺自身としては不幸だよな……

第二十六話 ずれていく？（後書き）

冠です。

輝どうでしょうか？

みなさま的に輝はどう映っていますか？

もしよろしければ教えてください。お願いします。

## 第二十七話 どうしてこうなった？

俺は二人と一緒に隣に住む人に挨拶に向かった  
隣の人の表札がなく誰が住んでいるのかわからない

ピ〜ポ〜ピ〜ポ〜

なんかベルの音が救急車の音に聞こえるんだけど  
どう思いついたのか分からないけど  
隣の人もこの二人同様変人だな。

「はいどちら様ですか？」

ドアから現れたのは俺達と同年ぐらいの人だった  
外見はかっこよく背は180くらいだろうか？  
いちよう挨拶しないと

「今度隣に住む事になりました音ノ葉です。」

「あれ同じクラスの輝と伊織じゃないか

名前言われるまでお前らの事思いつきもしなかったよ。」

「私も同感よ元近朱里（もとちか しゅり）あなたが私達に  
話しかけるまで思いつきもし無かったわ。」

「これは手厳しいな。」

元近朱里はニコニコしながら俺達をみている  
てかこいつ俺と同じクラスの人かよ  
やばいところ見られたよなど思われるんだろう

「おやお前らも同棲するのか？」

「そつよ。」

ひかるううう!!!普通に肯定してんじゃないよ  
ん?今元近「お前らも。」って言ったよな  
いちよう聞いてみよう

「元近今お前らもって言ったよなどという意味かな?」

「俺も同棲してるんだよ知らなかったのか?」

後朱里って呼んでくれ俺も伊織って呼ぶから。」

「なに外で盛り上がってんだよ朱里。」

中から出てきたのは綺麗よか怖い女の人が出てきた  
背は155くらいだけどなぐつちーよりは大きい小さいよな

「伊織と輝が同棲してるって笑い話してるんだよ龍ちゃん。」

龍ちゃんと呼ばれた女は確か学校では不良で通ってる奴だよな

山井龍(やまい りゆう)結構怖い奴なんだよな

「そつなんだ。隣にいる女誰だ?ひか。」

「楽って言うロボットよりっちゃん。」

「ロボット!まるでファンタジーだな。」

「そつね。」

輝がひかって呼ばれてるよ意外と仲が良いんだな  
てかりっちゃんってなんだよ何処の不良がそんな可愛らしい名前で  
呼ばれてるんだよ!

「つもる話もある中に入ってゆっくりして行きやがってください。」

中に入りたくないよ怖いよ  
でもどうせ拒否権なんてないんだろうな  
輝めっちゃ目がキラキラしてるもん

「行きましょ伊織。」

「サーイエツサー。」

第二十八話 マリオネットの狂愛者？（前書き）

貴也視点からいきます

## 第二十八話 マリオネットの狂愛者？

薄暗い廃工場

「やあやあ貴也君キミって一般人に負けたんだろ  
その人に興味持ちちゃったよ。」

今度その子に会いに行っちゃおうかな。」

「葵テメエ！伊織に手出したらタダじゃおかないぞ！

伊織は俺の獲物なんだからな。」

「貴也君の意見なんて聞き入れるわけ無いじゃんアハッ

僕は愛を求めているんだよ伊織君が僕に愛をくれるかもしれないじ

ゃん。」

「チツ。」

だからこいつは嫌いなんだよ

人形の分際で愛なんて求めるなよな

貴也と話してるのは灰色の布を被っている十歳くらいの少年だった。  
名は葵それ以外にはマリオネットの葵、嘘言の葵なんて呼ばれてい  
る。

葵と呼ばれる人の隣には三体の人と同じ形をした人形が笑顔で立っ  
ている。

「そんなに怒らないでよ人形だって愛が欲しいんだよ。」

「葵の愛は歪んでんだよ！

生きた人間をそのまま人間にしようって思うことなんてできない  
な。」

「呪われた人形の話っていっぱいあるよねそれが実体化したと思え  
ば良いじゃん。」

なんなんだこの人間の考えている事が分からない  
葵はいつたい何をしようとしてるんだ？

「さつき僕の人形が伊織君の居場所教えてくれたんだ  
貴也君の通っていた学校の近くの駅のマンションにいるらしいよ。」

「人形？ここにいたので全部じゃないのか？」

「僕は人間じゃないだよ不完全の呪いの人形

呪いの力で人形を操るのなんて人を殺すくらい簡単だよ。」

狙いは伊織か俺の獲物を狙うなんてふざけてやがる

葵よりも早く伊織のもとに行つて教えとくか

行つてもどうせ怒られるけど

俺の伊織のためだと思えば無問題さ

「ちょっと出かけてくるついで来るなよ。」

「おおよ？もしかして伊織君の手助けするなんていわないよね？」

「もし言つたらどうなるって言うんだよ？」

「貴也君をコレクションにするのっていいかもね。」

「フンッ。」

葵の戯言を聞くだけ無駄だな

伊織に会いに行こうつとルンルン

貴也は廃工場から出て行つた

葵は口元を歪ませて笑っていた

「せいぜい楽しく踊つてくれよ馬鹿共が！

俺は正直者の嘔吐き

「 真実と嘘は表裏一体さ。」

ただただ笑っていた。

**第二十九話 最悪な助け舟？（前書き）**

伊織視点に戻ります。

## 第二十九話 最悪な助け舟？

朱里の家は意外と綺麗だった。

家具はパソコンとテレビ生きるのに最低限大切な家電しかなかった。

「意外とスツキリしてるんだな。」

「龍ちゃんが綺麗好きでねなんか似合わないだろ。」

「たしかぶふえ「似合わなくて悪かったな！」」

山井に弁慶の泣き所水平蹴りをやられた

足が折れるって俺は体鍛えてないんだから！

「なんで俺のこと蹴るんだよ！！」

「朱里のことなんて蹴れると思ってるのか？ああ！！」

「思っています。すみませんでした！」

「分かればよろしい。」

恐ろしかったなまはげを想像してみる

まさにそのまんまだから！

なまはげが水平に蹴りいれてくるんだよ想像してみる

チョー怖いから

「だったら悪い子は伊織ね。」

「何言ってるんだひか？」

「それが「わああああああなんでもないから何でもありませんから！」」

クソッ

俺は輝の耳元でこそこそ話するように話しかけた

「だからなんで俺の心読めるの？」  
「なんとなくそう思ったからよ以心伝心ね。」  
「嬉しくねえんだよ大体なんで思ったこと言っちゃうの？」  
「変な事思っのが悪いんだよ。」

そう言って輝が俺に裏拳をいれてきた  
ちようど鳩尾に入っっていつてゝのなんの。  
俺がのた打ち回っっているうちに輝達が盛り上がっている  
なんか置いていかれた気分だ  
寂しくなんてないやい

「伊織何こつち見つめてるの？」  
「別に寂しくなんてないんだからね！」  
「何でオネエ言葉なんだよ！」  
「五月蠅い朱里は龍といちゃいちゃしてればいいじゃないか！」  
「テメエ!!!??殺す。」

やべ俺殺されるかもしれぬ  
俺のこと好きな人もうこの世にいなくなっっちゃうけど悲しまないでね  
俺はみんなの心の中にいるから

ピ〜ポ〜ピ〜ポ〜

「おい伊織お前が受けに行って来い。」  
「なん「殺されてえのか？」」

分かったよ行きますよ

「誰ですか。」

「親愛なる伊織にお届け物です。」  
「なっ！」

なんで貴也がいるんだよ！

驚いたのは貴也がクロネ の作業服を着ていたからだだった  
輝を殺そうとしてる奴がなんてお茶目な服着てるんだ？

「伊織を狙ってる奴がいるこれもっていきな。」

貴也から渡されたのは銃二丁

狙われている？誰に？なんで？

「まさか貴也が狙っているなんて「ないない。」

「まさかそつち系？」「死ね。」

馬鹿のこといってないで本当のこと聞こう

「で、誰に狙われてるんだ？」

「マリオネットの葵。」

「マリオネット？」

「ヒントはこれだけばいばい伊織。」

「待て！」

貴也は二階から飛び降りて消えていった。

何が目的だったんだ？

今日の「偶然の不幸はそれとも……」はこれまでまた来週！  
なんか「刀 たり」ぽいな……

### 第三十話 脳が爆発した？

玄関から帰ってきた俺は見てはいけないものを見てしまった  
時間を巻き戻しできるんだっいたらこのまま家に帰るんだっただ…

「朱里いいい！！！！ぶつつつ殺す！！！！」

「ぎよぶうはははははは！！！！伊織、た、助けて。」

「輝！パス。」

「トス。」

「NOOOOOOOOOOO！！！！」

まさか会話でのパスにこんな返し方があるだなんて！？  
今度みんなも使ってみようね  
だいたいなんでこんな事になってるんだらう？

「ひよええええええ！し、死ぬって…」

「朱里を殺して私も死ぬ！」

「俺は死なないで龍が死ぬって事にはならないですか？」

「ああ！！」

「ならないですよね。」

夫婦漫才見ても楽しくないな〜てかいい加減にしろって感じだな。  
助けたら俺も殺されそうだな。  
どうしたものかな〜

「で、誰だったのよ？」

「何が？」「チャイム押した人だよ。」

「貴也だよ。」

「「「貴也！！！！」」」

なんでみんなビックリしてんだよ  
俺おかしなこと言ったかな？いや、言っていないな！  
ちよつち茶化してやるう。

「まるで鳩が豆鉄砲食らった様な顔してるな  
要するにアホ面だつてぐぶら」黙れ！おい貴也つて私達を撃つた  
貴也か？」

「・・・」

「なぜに喋らん？」

だつて黙れつて言ったもん

絶対喋らないこの地球が滅びても喋らないもん

「馬鹿みたいに拗ねてるんじゃないよ！」  
「ツーン」

「黙れ取り消しこれでいいだろ。」

「GJだぜ！その貴也だよ・・・あ。」

「・・・あ、じゃねえよ」「」

「貴也捕まえるの忘れてた！！！！！！！！！！」

次会つたら絶対捕まえてやる！

待っているよ貴也！

「かつこよく終わらせようとそうは行かないんだから。」

### 第三十一話 仁兄貴と俺は？

「それじゃ俺達は帰るな。」

「ばいばい」

「二度と来るんじゃないぞ！」

俺達が朱里の家を後にして隣にある自分の家に帰った。  
ふう〜今日は色々あって疲れたなとりあえず寝るか・・・  
明日の朝風呂に入ろうと。

「俺は疲れたから寝るから適当に飯や風呂やっといてな。」

「おやすみ。」「おやすみなさい。」

「それじゃおやすみ。」

輝と楽にあいさつをして輝と俺の部屋のベットにもぐりこんだ  
ちなみに朱里の家では楽は無言だった・・・たぶん緊張してたんだ  
ろう

寝ようと思った俺はふと思い出した。

あれ仁兄さんが優しくなったのっていつだったっけ？

小さい時はいつもツンツンしてたんだっけな〜。

まあどうだっていいや。ちょうど眠気も襲ってきたし。

このときの伊織はまさか昔の事を夢で見るとは思ってたなかった。

\*\*\*\*\*

あれはいつの頃だったかな？たぶん小学校に入る前だったような。  
俺が幼稚園の年長さんで仁兄ちゃんが小学二年生の時の冬の時だっ

たけな。

「仁兄ちゃん一緒に遊ぼう。」

「馬鹿言ってるじゃねえよ父さんも母さんも大変だから家のことやってるんだから俺に面倒かけるのやめてくれないか。」

俺の家は父さんも母さんも共働きだから遊んだり話なんてできなかつた。

まあ一話で説明したけど俺は友達がいから遊び相手もない話し相手もない

だから俺は毎日のように仁兄貴に遊んでっをお願いしてたっけなでも兄貴は家事をやらなくちゃいけないから

「暇じゃない。」「一人で遊んでろ。」「忙しいんだ。」

って言って俺を追い返してたっけな。

でもこのときは違って俺は駄々をこねたっんだ

「そうやっていつも遊んでくれない仁兄ちゃんは僕の事嫌いなのか？

もしも嫌いじゃないなら遊んでよ!!！」

仁兄貴は最初驚いた顔してたよなまさか俺が反論するなんて思ってたっけな

でも、次には鋭い目つきになって怒鳴って言ったっけ。

「俺の邪魔をするお前なんて嫌いだ!！」

今になったら俺のせいなんだけど

でもこのころの俺は理解できなくて仁兄貴の言ってる嫌いだけしか

聞こえなくて

「だったらこんな兄ちゃんいない  
僕はこんな家出て行く!!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5044k/>

---

偶然の不幸それとも・・・

2010年10月8日13時53分発行